

きのこ・かび 関連図書の紹介

吹春 俊光

2008年に出版された、きのこ・菌類関連の本・雑誌を、ほぼ発行順に紹介します。きのこ関連本ではありませんが、2008年の私の中でのヒット作は「日本語が亡びるとき」(水村美苗, 筑摩書房)でしたが、ここでコメントはできません。是非読んでみてください。

「チョコレートを滅ぼしたカビ・キノコの話—植物病理学入門」

著者：ニコラス・マナー／小川眞（訳），出版社：築地書館，2008年8月25日発行，四六判，299頁，ISBN：978-4-8067-1372-2，2940円（税込）

私は農学部出身であり、農学部の授業で植物病理学という科目を履修した。本書に掲載されている、ジャガイモ疫病菌 (*Phytophthora infestans*)、オランダニレ立ち枯れ病 (Dutch elm disease) などは、今となっては名前を聞いただけでも非常に懐かしく、植物病理を教えていただき、病理の英語の本一冊と一緒に読んでいただいた山本昌木先生を懐かしく思い出す。植物病理学の分野には、ウイルスから細菌類、原生動物、そして菌類でも、鞭毛をもつ鞭毛菌類（卵菌類やツボカビ類）、接合菌類、子囊菌類、担子菌類などと、ありとあらゆる分類群に属する病原菌が怪獣総進撃的に登場する。それぞれに多様な生活様式をもった多様な菌類のその暮らしぶりを理解するには、初学者にはなかなか難しい。ぼんやりした学生だった私は、病理の教科書を何回読んでも、その多様な分類群は、複雑すぎなかなか理解できなかった。しかし、そんな淡々とした植物病理の教科書のなかに、欧州で19世紀に蔓延したジャガイモの疫病の話が、コラムとして紹介されていた。疫病はアイルランドも襲い、疫病によるジャガイモの食料飢饉は餓死をもたらし、あるいは移民によって人口の半分以上が減少したこと、米国へ大量の移民が渡ることとなり、その中に、ケネディー家もあった、というものである。淡々とした病気の感染方法や生活環の話よりも、こんな話をもつ



と読みたい、もっと知りたいと思ったものだ。

本書は、身近であるコーヒー、チョコレート（カカオ）、ゴム、穀類、ジャガイモなどの栽培植物や公園樹木等と植物病原菌の、人間の側からみたドラマを紹介した本である。私が読みたいと思った、教科書には2頁しか紹介されていなかった植物病原菌と被害植物、それをめぐる人間ドラマが、翻訳で約300頁にわたって堪能できる。植物病理分野の教授が直接書いたものなので、アイマイな記述はなく、示唆に富み、小川先生によるすぐれた翻訳に支えられ、非常によみやすい。登場する病原菌も、細菌類（オランダニレ立枯病菌）、クロミスタ界（ジャガイモ疫病菌）、子囊菌門（クリ胴枯病菌、ゴムノキの葉枯病菌）、担子菌門サビキン類（コーヒー葉さび病菌、コムギの黒さび病菌）、担子菌門ハラタケ綱（カカオの天狗巣病菌）などと広汎にわたる分類群が登場する。著者は病原菌とともに人間の影響を重大視しているところがあり、切り倒される直前のアメリカグリの巨木の写真（37頁）は胸をうつ。作物の病原菌を撒布させるために米軍が第二次大戦中に開発した風船爆弾の図（238頁）の紹介もあり、病原菌も脅威だが、人間の所行も相当に悪辣であることも、それとなく紹介してある。最後の訳者である小川先生の後書きでも、そのことについてふれられており、菌類と栽培植物の勉強をしながら、人間と地球の未来を考える仕掛けとなっている。

「いきなりきのこ採り名人—不思議でおもしろいきのこワールドへようこそ」

著者：井口 潔ほか、出版社：小学館、2008年8月25日発行、25.6×21cm、97頁、ISBN：978-4-09-104278-1、1365円（税込）

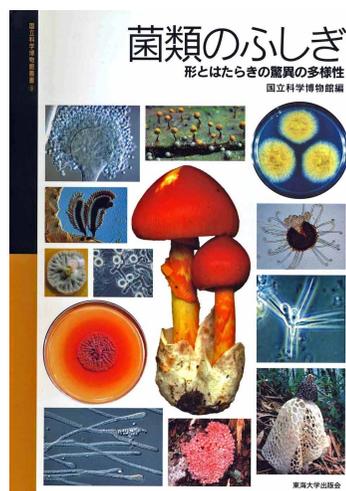
本書は、元BE-PAL編集長できのこマニアのK藤さんが企画された、見て楽しいきのこムック本である。表紙には、サライ/BE-PAL共同企画、という最強雑誌の名がみえ、その路線の楽しい作りの本となっている。本書の半分以上を占めるのは「極意」と称するきのこ狩りガイドと図鑑頁であり、きのこ初心者には親切な記事だが、やや新味に欠ける点が残念。類書で読むことの出来ない部分は、表紙写真を撮影し、きのこ料理記事をBE-PALで現在連載中の蜂須賀さんの料理頁である（50-53頁）。短いが、そこには和食と西洋料理についての奥深い見識が述べられ大変に興味深い。本書を紹介した有名な佐野書店のブログには、本書の巻末に引用された文献の説明についての、ふるえあがるほど恐ろしい辛辣なコメントがある。興味あるひとは佐野書店ブログ（2008年8月）をご覧ください。



「菌類のふしぎー形とはたらきの驚異の多様性」

編者：国立科学博物館，出版社：東海大学出版会，2008年9月20日発行，26×18 cm，216頁，ISBN：978-4-486-01793-6，2940円（税込）

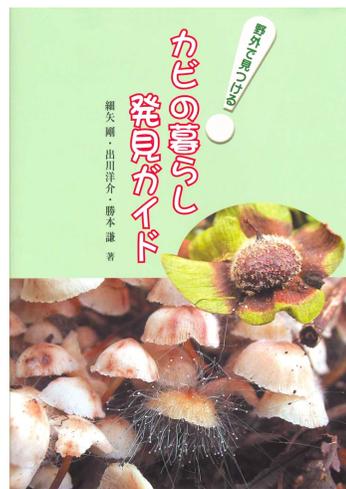
2008年に上野の国立科学博物館でおこなわれた「菌類のふしぎ展」の内容を補完するものとして、国立科学博物館叢書シリーズの9番目の本として出版されたものである。国の博物館が威信をかけておこなった展示であるので、本書の本気度も高い。菌界に属する各分類群が、まんべんなく、大量の写真と図によって紹介されている。子囊菌類や担子菌類ばかりでなく、類書では見落とされがちな鞭毛菌類（卵菌類、ツボカビ類、サカゲツボカビ類）や接合菌類についても、専門家が気合いを入れて解説を書いている。カラー頁が半分を占め、価格を考えると信じられないくらい贅沢なつくりである。分類の紹介についても、鞭毛菌類。接合菌類、子囊菌類、担子菌類が、DNA情報をもとに再編されなかった古き良き時代の分類にもとに紹介され、そのあとに、DNA情報によってそれぞれがどのような具合に再編されたのか、大量の文献とともに懇切丁寧に紹介されている。例えば担子菌類や子囊菌類は、2007年の D. S. Hibbett 先生の最新分類学に基づき、根田先生や細矢先生によって最新体系が紹介されており、うるさ方も納得のいくつくりとなっている。本書の編集をおこなった細矢さんは、科学博物館の2008年の菌類のふしぎ展と同時並行で本書の執筆と編集をおこなっており、細矢さんの、仕事の処理能力の高さを証明する本でもある。仕事が極端におそい私には、まるでまねができません。ほんとうによくできているので、是非、お買い求めください。



「カビの暮らし発見ガイド」

著者：細矢剛・出川洋介・勝本謙，出版社：全国農村教育協会，2008年10月10日発行，21×14.6 cm，147頁，2300円（税込）

2008年の科博の展示室を出たところの販売コーナーに、もやしもグッズと並んでいた。しかし、アマゾンで検索しても出てこない。どうやら本書は市販されていないらしい。展示にあわせて企画中のものを取りあえず本の形にしたものらしい。もっと姿を整えて、あとで正式に出版されるようだ。きのこの本は数多いが、カビの入門書・写真集はすくない。本書には鮮明で美しい写真が満載である。伊沢正名さんのきのこ写真は有名だが、それにしても植物病理のここぞという

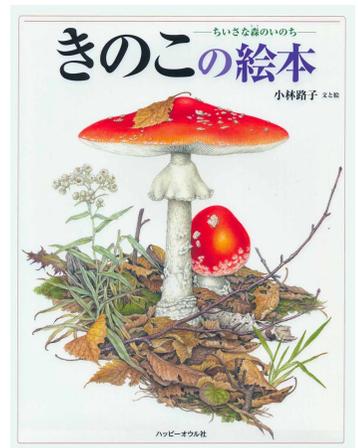


写真を沢山とっておられるのにおどろいた。当然だがどれも鮮明でよい写真。こうやく病のところでは、子実層の下をめぐってカイガラムシが生息している状況をちゃんと写真に撮ってある。このことは本でしか知らなかった。ふむふむ。そして植物病理分野の菌の勝本先生による解説がとても興味深く贅沢。ナシ赤星病のところでは、ナシ園の周囲をイブキの生け垣で囲って赤星病の大発生を招いた例、タケの赤衣病のところでは、チャレンジャー号の話から始まる。それぞれに味わい深い。いくつかある勝本先生の半頁のコラムもとてもよいです。3章のカビを捕まえよう、のところをみると、印東玄弘・三浦宏一郎・椿啓介・徳増征二各先生方のお顔が目には浮かぶ。細矢さんも出川さんも、東京教育大学・筑波大学系の方々なのだ。この章ではカビを探して捕まえ観察する方法がのべられている。お二人とも博物館で菌学講座をそれぞれ主催されるのである。ふむふむ。そして最後の4章カビの図鑑には、いったいどうやって探すのか、どうやって分離するのか、といった写真が並んでいる。きっと出川さんなのだろう。分離にまつわる話をもっと聞いてみたいという気持ちになる。ということで、本書は凡百のムック本や写真集とは一線を画する非常に良くできた本であるので、はやく、購入できるかたちで出版してほしいです。

「きのこの絵本 ちいさな森のいのち」

著者：小林路子，出版社：ハッピーオウル社，2008年10月16日発行，28×21.5 cm，47頁，ISBN：978-4-902528-30-5，1680円（税込）

約20の見開き頁に、季節ごとのきのこが多数紹介されている。それぞれの頁には、小林さんの絵本になじみのあるクマともヤマネとも異なる不思議生物が、それぞれの季節を背景にきのこを持つ姿が小さく書き込まれている。とても風情があり、この絵を見ているだけで、その風景と季節に吸い込まれていきそうだ。最後には、きのこの探し方、きのこって何？、自然のなかの働き、などの勉強頁がついているところが、小林さんの、実は真面目で几帳面な性格があらわれている。すごく良い。販売力のつよい本屋さんに英語版をつくってもらえれば、小林さんのどの絵本も、世界的に強力で売れるとおもうのだが、とても残念。謎のいきものが茸を持って風景の中にとけこんでいる小林さんの絵が、私は大好きです。小林さんの好著「すぐそばにあるアナザーワールド」（白日社、2003年）、「なにがなんでも！きのこが好き」（日本経済新聞社、



1998年)も併せてよめば、会わなくても小林さんファンになります。是非、手に入れて読んでみてください。

「きのこ文学大全」

著者：飯沢耕太郎，出版社：平凡社（平凡社新書447），2008年12月15日発行，319頁，ISBN：978-4-582-85447-3，880円（税別）

千葉菌の会報にも、きのこが関与する「きのこ物件」として、「きのこ怪獣フォーガス」、「七人の侍の中のセリフ」、「マタンゴ」、「バス停、木野子」、「侵略円盤キノコング」などを細々と取り上げてきた。しかし、まさか、このようなきのこ物件が本として集大成されるとは思ってもみなかった。本書は漫画、音楽、映画、切手など、いわゆる文化系の分野に登場するきのこモノを、あいうえお順に列挙したつくりとなっている。各きのこ物件は、初級、中級、上級に分けられ、上級のジャンルになると「囲碁や将棋でいえば有段者向き。文学、哲学、心理学、民俗学などの人文系の素養がないとややむずかしいかもしれない」と、読者のキノコ度ではなく文化度の高さを問う物件が登場する。たとえば「ナボコフの記憶よ語れ」は上級、「筋肉少女帯のキノコパワー」は初級である。そして「エロ」や「死や狂気」などの匂いがあるものは「毒」のマークが付されている。例えば「花輪和一の茸の精」は、中級&毒、のランク付けである。なんと8頁にわたって紹介された「マタンゴ」は、何故か、上級&毒、のランクとなっており、世界的カルト女優である水野久美をはじめとして、天野英世、福島正実、ホジスン、SFマガジン、大槻ケンヂ、橋本治などをキーワードに、著者の深読みと裾野の広い教養が披露され、読者の人文系の素養を問う解題となっており、まさに上級者向けの解説が楽しめる。教養のもつ弱みとしては、引用の引用は本当か、と思わせる場合もあり、例えば「不思議の国のアリス」（23-27頁）で描写された幻覚は、引用によりベニテングタケの幻覚によるもの、という考察が加えられているが、描写されている視覚・空間感覚のひずみはベニテングタケでは体験することは実際には難しく、今や日本では御法度成分のシロシビン系の催幻覚性物質がもたらす中毒作用ではなかろうか、と私は思ったりもする。項目の並びが、あいうえお順であることは、「川上弘美」の次は「官能小説」という出会いもある。聞いたことも無いような、きのこ物件が大量にならんでおり、どこから読んでも楽しめる作りとなっていて、きのこ好きならずとも楽しめる本となっています。



「考えるキノコ 摩訶不思議ワールド」

監修：佐久間大輔，著者：大舘一夫ほか，出版社：INAX出版，
2008年12月20日発行，20.5×21cm，69頁，ISBN：
978-4-87275-846-7，1575円（税込）

（株）INAXは、大正13年に伊奈製陶株式会社として創業されたタイルメーカーで、現在では、風呂・台所・トイレなど住宅建材を提供する会社である。大阪・名古屋・東京に展示ギャラリーをもっており、全国3箇所のギャラリーでは、それぞれのギャラリーが企画・製作した展示が巡回する。本業関連の建築やデザインに関する展示が多いのだが「あやとり」、「クモの網」、「骨」など、不思議で独創的なテーマで展示をおこなっており、なかなかあなどれない。そのINAX大阪が、2008年に企画した「考えるキノコ」という展示の図録が本書である。

私などの学芸員が通常開催する展示や図録は、貧乏性がたたり、分類・生態、等々の勉強スペースがつつい多くなる。しかしINAXの展示と本は、ぜんぜんちがう。説教臭さがない。まずは、大舘さんのイントロとテーマ設定がよい。人がきのこを学ぶ過程は、ある一定の進化をたどる。まず「食べるきのこ」、そして「名前を調べ・見るきのこ」。やがてきのこの姿がなくても、きのこに思いをはせることのできる「考えるきのこ」の境地に至るといふ。きのこを考えることで、これまでとは違う世界が見えてくるというのがイントロである。そのあと、佐久間さんのきのこ写真の解題、私の西洋・日本のきのこ図譜の解説、飯沢耕太郎さんのきのこ物件紹介、と続く。それらの記事の間に、これまで紹介されたことのなかった、樋口源一郎、青木実、の解説がある。樋口さんは「真正粘菌の生活史」「きのこの世界」などきのこを中心とした科学映画を製作した人物である。青木さんは、会報24号に詳しく紹介したアマチュア研究者である。お二人ともに通常のきのこ本や展示にはまず登場しない。特に青木さんが商業出版物で紹介されたのは、今回が初めてかもしれない。あの佐野書店も、今回の本と展示に背後で全面協力をしている。

本書と展示の企画の相談があったのは2008年の8月の末だった。「あと3ヶ月しかないんですが、なにか良いテーマありませんかね～」というものだった。ありえないあまりの短期準備。私のところの博物館から提供できたのは、約15年くらいかけて博物館で買い集めた西洋と日本のきのこ図譜。書いたこともないような内容の原稿を書きながら、とても勉強になりました。田舎の学芸員なので、図録といえば野暮なデザ



インの図録しか見たことがなかったのだが、本書の校正がpdfで送られてきたときに、そのオシャレな出来に心底びっくり仰天。本をつくるスタッフ（デザイン、編集、校閲など）が実力者ぞろいでとても充実しているのである。最初の大阪ギャラリーの展示開催中に、本書の初刷がなくなりかけているという売れ行きだそうで、シリーズの中でも販売の伸びがよいとのこと。

2009年3月6日～5月21日が名古屋、6月4日から8月8日が東京ギャラリーでの展示。ショールームの中の狭い展示室ですが、約1000点ほどの展示物が並んでおり、やや自画自賛になりますが、きのこ好きにとって展示は必見、図録である本書は買って損はありません。